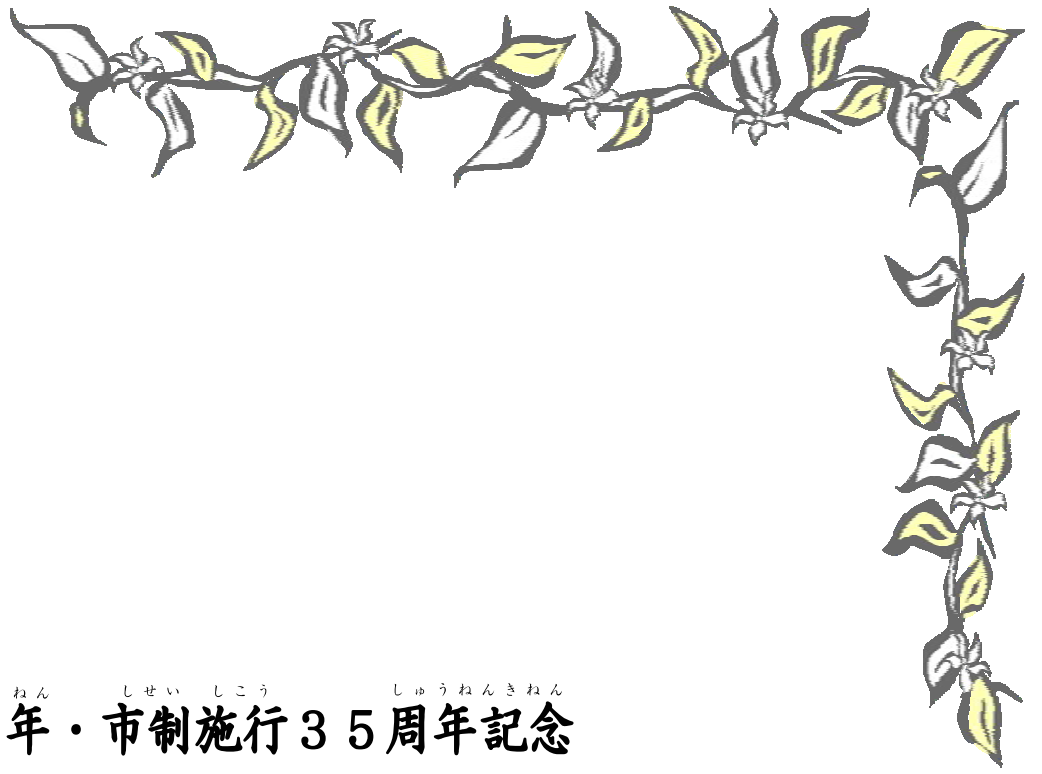




せんご ねん しせい しこう しゅうねんきねん
戦後60年・市制施行35周年記念

せん ご ねん ねが
戦後60年の願い

わたし きおく なか せんそう
～私たちの記憶の中の戦争～



にいざしけんこうへいわとしせんげん
新座市健康平和都市宣言

“にいざ”って どんなまち さわやかな風が息吹き

たの 楽しい語らいが聞こえ えがお 笑顔のあふれるまち

わたしたちは みどり 緑にいこい

すこやかな心とからだ そだ 育てます

へいわ 平和を愛し じゅう 自由で明るいまち きず 築きます

ふれあいを大切に きょうりよく 協力と助け合い ひろ 広げます

そして こどもたちに バトンタッチ

けんこう 健康で平和な す 住み良いまちを

しょうわ 昭和 ねん 63年 がつ 6月 日 か 4

はじめに

今年は、戦後60年という歴史上の節目の年に当たります。

60年という月日が流れる中で、戦争は、次第に私たちの記憶の中から薄れ、時代の流れとともに、少しずつ私たちの日常生活から遠い存在になっています。しかし、戦争は決して忘れてはならない私たちの“記憶”なのです。

そこで、戦後60年に当たる今年、戦争に対する思いを改めて心に刻み込み、二度とこのような悲惨な過ちを繰り返さないために、実際に戦争を体験した皆様の声や平和へのメッセージ等をまとめた記録集「戦後60年の願い～私たちの記憶の中の戦争～」を作成しました。

皆様からお寄せいただいた体験記には、身につまされる多くの悲惨な体験が語られています。“その心の傷跡は、戦後60年経った今日でも消えることはない”ということを痛感します。また、平和へのメッセージや短歌、俳句からは、幅広い世代の皆様からの平和を願う熱い思いが伝わってきます。

この記録集が、後世に語り継いでいく平和への道しるべとなり、私たち一人ひとりの平和を愛する気持ちが世界中に広がっていくことを願ってやみません。

最後になりましたが、この記録集をまとめるに当たり、辛い体験を思い出し、語ってくださった皆様、また、平和への切なる願い、熱い思いをメッセージや短歌、俳句に込めてお寄せいただいた皆様に、改めて感謝を申し上げます。

平成17年12月

新座市長 須田健治

もくじ 目次

はじめに

I 戦争体験記

・ 浦川 敏満	1
・ 奥田 正一	5
・ 木村 光雄	8
・ 小泉 茂	1 1
・ 斉藤 喜作	1 3
・ 佐伯 信亮	1 6
・ 児玉 孝一	1 9
・ 田中 定一	2 3
・ 出嶋 輝子	2 6
・ 保坂 正夫	2 7

II メッセージ

・ 陳 萍	2 9
・ 浦川 未早 (中学 2 年生)	3 0
・ 斉藤 のどか (中学 2 年生)	3 0
・ 鈴木 千陽 (小学 2 年生)	3 1
・ 石岡 大昌 (小学 3 年生)	3 2
・ 斉藤 勇大 (小学 3 年生)	3 2
・ 武本 明花里 (小学 3 年生)	3 3
・ 山本 夏寧 (小学 3 年生)	3 3
・ 福島 翔 (小学 4 年生)	3 4
・ 三代澤 憲伸 (小学 4 年生)	3 4
・ 弓座 まなつ (小学 4 年生)	3 5

III 俳句

・ 池谷 英夫	3 7
・ 石原 恵美子	3 7
・ 浦川 宏志	3 7
・ 大沢 志織	3 7
・ 鯉川 武英	3 7

・ 高麗	みのる 実	・ ・ ・ ・ ・	3 7
・ 小山	やすこ 泰子	・ ・ ・ ・ ・	3 8
・ 下田	セツ子	・ ・ ・ ・ ・	3 8
・ 高草木	かずこ 一子	・ ・ ・ ・ ・	3 8
・ 高橋	みちこ 道子	・ ・ ・ ・ ・	3 8
・ 田口	せいこ 正子	・ ・ ・ ・ ・	3 8
・ 田村	もも子	・ ・ ・ ・ ・	3 8
・ 津谷	けんぞう 謙式	・ ・ ・ ・ ・	3 9
・ 並木	まさこ 万佐子	・ ・ ・ ・ ・	3 9
・ 松岡	こうげつ 香月	・ ・ ・ ・ ・	3 9
・ 水田	いっぶ 一芙	・ ・ ・ ・ ・	3 9
・ 山形	れん	・ ・ ・ ・ ・	3 9
・ 原田	たくむ 工夢	(小学 2 年生) ・ ・ ・ ・ ・	4 0
・ 石岡	ひろまさ 大昌	(小学 3 年生) ・ ・ ・ ・ ・	4 0
・ 大塚	じゅんぺい 淳平	(小学 4 年生) ・ ・ ・ ・ ・	4 0
・ 垣澤	わかな 稚奈	(小学 4 年生) ・ ・ ・ ・ ・	4 0
・ 白塚	ゆうし 湧士	(小学 4 年生) ・ ・ ・ ・ ・	4 0
・ 小澤	こうせい 昂世	(小学 5 年生) ・ ・ ・ ・ ・	4 0
・ 高橋	まさや 柁哉	(小学 5 年生) ・ ・ ・ ・ ・	4 0
・ 田所	ともひろ 友洋	(小学 5 年生) ・ ・ ・ ・ ・	4 0
・ 岡嶋	ゆうや 裕也	(小学 6 年生) ・ ・ ・ ・ ・	4 1
・ 新田	ゆきな 幸菜	(小学 6 年生) ・ ・ ・ ・ ・	4 1
・ 森田	しょうへい 翔平	(小学 6 年生) ・ ・ ・ ・ ・	4 1

IV 短歌

・ 小泉	しげる 茂	・ ・ ・ ・ ・	4 3
・ 小泉	しょうへい 正平	・ ・ ・ ・ ・	4 3
・ 並木	きよこ 清子	・ ・ ・ ・ ・	4 4
・ 伊原	りん 凜	(小学 3 年生) ・ ・ ・ ・ ・	4 4
・ 齊藤	ゆうや 雄也	(小学 6 年生) ・ ・ ・ ・ ・	4 4
・ 吉野	さき 咲	(小学 6 年生) ・ ・ ・ ・ ・	4 4

V 新座市平和展実施結果

4 5



I 戦争体験記

いま にほん そうぞう せんそう す くに しょうわ
今の日本では想像もつかないほど戦争が好きな国であった。昭和20
ねん がつせんそう やぶ せんりょうか みんなしゅしゅぎ くに う か
年8月戦争に敗れ、アメリカの占領下におかれ、民主主義の国に生まれ変
わったのである。

そして60年日本は戦争を知らない国となった。現在ほど平和を謳歌し
た日本は過去にはなかったのである。しかし、戦後生まれの人たちは戦争
の悲惨さを知らない。そのため漫画や読み物の中の戦争を美化したもの
を目にして、それにあこが ひと すく
憧れる人も少なくない。

わたし せんそうたいけんしゃ ひとり せんそう ひ さん みにく の
私は戦争体験者の一人として、戦争の悲惨さ、醜さなどについて述べ
たいと思うのである。たいへいようせんそう やぶ にほん せんそう れんぞく むかし
太平洋戦争に敗れるまでの日本は戦争の連続で、昔
はちいき けんりよくあらそ く かえ げんこう えき はかたわん もうこぐん せ
は地域ごとの権力争いが繰り返され、元寇の役では博多湾に蒙古軍が攻
めてきて、当時の鎌倉幕府がその対応に追われたのである。その後も日清
せんそう にちろせんそう し な じ へん たたか たいへいようせんそう かくだい
戦争、日露戦争、支那事変その戦いが太平洋戦争へと拡大したのである。

わたし しょうわ ねん がつまん さい こ ころ あこが
私は、昭和16年1月満15歳となり、子どもの頃からの憧れであっ
たりくぐんようねんがっこう はい ゆめ おや ないみつ がんしょ だ
た陸軍幼年学校に入ることが夢であった。親には内密に願書を出した。
ぶ じ ごうかく とし がつ は にゅうたい おや はんたい
無事テストに合格してその年の3月晴れて入隊できた。親の反対は
なみたいてい
並大抵のものではなかった。

すぐに訓練がはじまり兵隊の卵が生まれたのである。しかし、戦いは
ひ ま なまぐさ とし がつ か ちゅうごく
日増しに生臭くなり、その年の12月8日アメリカ、イギリス、中国を
あいて せんせんふこく がくぎょうなか ゆ さき し せんじょう
相手に宣戦布告をしたのだ。学業半ばで、行く先は知らされないまま船上
のひと とうちゃく いま てきぜんじょうりく
の人となった。到着したところは、ボルネオ(今のベトナム)敵前上陸だ
ったがほとんど抵抗もなく、スムーズな上陸であった。ただちになん か
南下し
てシンガポールへと進み、すす よくとし がつ
翌年2月ジョホールバルからシンガポール
とう てきぜんじょうりく ていこう せんゆう
島へ敵前上陸がはじまったのであるが、すさまじい抵抗があり戦友の
なんにん たたか せん し わたし さい ちゅうしんぶ せんりょう
何人かがこの戦いで戦死した。そのとき私は16歳。中心部を占領して

やく げつきゆうよう ふた た てんせん めいれい くだ
約 1 か月休養して、再び転戦の命令が下り、ビルマ（今のミャンマー）
へ。アメリカ映画「戦場に架ける橋」で有名なクワイ河を渡っていよいよビルマへー。ビルマの戦いは悲惨の一語に尽きる。飢えと疲労と風土病。
ぶつし だんやく ほきゆう しょくりよう げん ちちようたつ ひと
物資や弾薬の補給はほとんどなく、食料は現地調達であった。人はなぜ
ひと あんい ころ せんそう ころ せんそう ひと ころ
人を安易に殺すのだろうか。戦争だから殺すのだろうか。戦争で人を殺し
ても罪にはならないのか。16歳の私は大きな矛盾を感じ始めていた。
へいわ ひと ころ はんざいしゃ は せんそう
平和のとき人を殺したら犯罪者としてのレッテルを貼られるが、戦争で
ひと ころ えいゆう おな ひとご
人を殺したら英雄である。なぜ？同じ人殺しではないのか。

なに くる おも ねん りくぐんしょうい しょうしん ぶ か
何かが狂っている。と思いつづけた。18年に陸軍少尉に昇進して部下
を持つ身となった。部下のすべては私より1回りも上の人ばかりであっ
た。ビルマは日本と違って四季がなく、1年の半分は雨期で毎日雨ばかり、
のこ はんぶん かんき てき あめ ふ ひ まいにちつづ
残りの半分は乾期で、1滴の雨も降らない日が毎日続くのである。

あつ のど かわ みず ほ げんち なまみず ぜったいの
ともかく暑い。喉が渴いて水が欲しくなる。だが、現地の生水は絶対飲
めないのだ。

はんとし ふ つづ あめ だれ おも
半年も降り続いた雨だからきれいな水だと誰もが思うのだろうが、そこ
が日本と異なるところである。木の葉などに溜まっている水を飲んだら、
もうれつ げり はじ くすり ぜったい う つ ぐすり じょうざい の
猛烈な下痢が始まる。薬など絶対に受け付けない。薬（錠剤）を飲んだ
ら1、2分でそのまま出てくる始末。私もその犠牲者の一人である。敗戦
の色が濃くなり、撤退（退却）を余儀なくされたとき、下痢などで行動を
とも できないものは、そのまま現地に残された。もし敵に襲撃された場合は
じけつ ほ めいれい かくじしゅりゅうだん こ わた わたし けんじゅう
自決して欲しい、との命令で各自手榴弾を1個ずつ渡された。私は拳銃
をもって、16名残されてしまった。

しょくりよう はんごう こめ いくにちい の
食料は飯盒いっぱいの米だけ。幾日生き延びることができるだろう。
ふ あん しょうそう むねん あ さかざき ばい こめ おも ゆ
不安と焦燥と無念さだけがこみ上げてきた。盃1杯の米を重湯にして
ぜんいん ぶんばい おもゆ う つ じょうたい し
全員に分配するのだが、その重湯も受け付けない状態である。このまま死
を待つだけだろうか。立って歩けなくなる。

ある日の明け方とうとうしていると、枕元に白い着物を着た老婆が静かに私に呼びかけてきた。「そのままだとまもなく死んでしまうぞ！夕べ飯盒炊飯したところに消し炭があるからそれを砕いて飲め」と言って立ち去った。朦朧とした頭で私は消し炭のあるところまで這って行き、その消し炭をむさぼった。するとどうだろう、いままで10分置きぐらいに用便をしていたのに、ぴたりと止まったではないか。驚きと喜びが重なって全員におなじ方法を講じたのである。それで全員元気を回復して原隊に復帰できたのである。

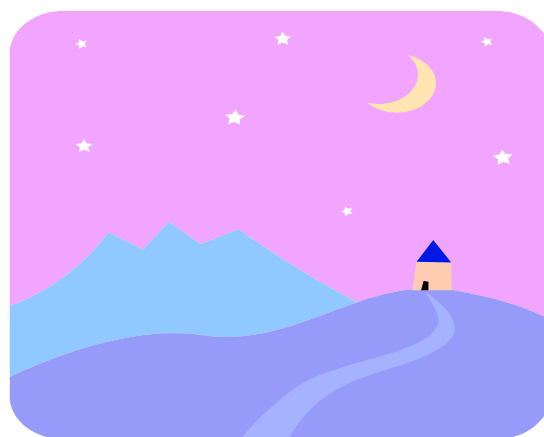
またある朝、点呼の折り、中隊長に報告を終え、訓示を聞いているときに、右側横方から敵に狙撃されたことがあった。当時、私は小隊長として勤務していたので、最前列の1番右にならんでいた。そのとき、朝日に照らされ目に飛び込んできたものは小さな金の観音像であった。「なぜここに金の観音像が…」と思ひ、一瞬つつつと前のめりしたのである。そのとき私の襟筋を弾がかすめて、次に立っていた兵とその次に立っていた兵の首を貫通したのである。一人目の私は無事で二人の兵の命を奪ったのである。金の観音像に見えたのは木片に朝露がたまっていて、それが朝日に反射し私の目には金の観音像として映ったのであったことがわかった。観音像に助けられたのは事実であり、以来60余年の間必ず月参りを欠かしたことはない。

丸7年の間戦争の真っ只中にいて楽しかったことは何一つもなかった。青春のすべては戦争で失ってしまった。勝っても負けても戦争で得るものはない。あるものは憎しみと死という犠牲と貧困と悲しみだけである。テレビゲームなどで戦いの場面をよく見かけるが現実はあるような生やさしいものではないことを若い人々は自覚していただきたいと思う。飢えと貧困と悲しみと死だけである戦争がいかに無意味なものであるかを再確認し、平和な日本が続くように願いたいものである。日本で始めて味

わう^{へいわ}の^{いしずえ}礎^{きず}を築いた^{おお}多くの^{かたがた}方々^{みたま}の御霊^{ぶん}にこの^{のこ}1文^{ぶん}をささげ残された
私^{わたし}たちが、この^{へいわ}平和^{まも}を守り続ける^{つづ}努力^{どりよく}を怠^{おこた}らないようにしたいものであ
る。2年^{ねんかん}間の^{ほりよ}捕虜^{せいかつ}生活^{ぐん}（イギリス^{ほりよ}軍^おの^{しょうわ}捕虜^{ねん}）を終えて^{ふくいん}昭和22年^しに復員^しし
たのである。

真実^{しんじつ}の戦争^{せんそう}を知^しることが平和^{へいわ}への道^{みち}しるべ

この^{きろく}記録^{わたし}は私^{たいけん}が体験^{たいへいようせんそう}した太平洋戦争^{げんざい}におけるビルマ（現在のミャン
マー）での^{せんじょう}戦場^{できごと}での出来事^{いちぶぶん}のほんの一部^しです。
機会^{きかい}があったら、また真実^{しんじつ}の戦争^{せんそう}の実態^{じったい}を知^しっていただきたいと
おもっています。



ときは しょうわ 17 ねん がつ はつこうしゅう もよう
時は昭和 17 年 9 月、初空襲した模様をまとめてみた。もちろん ほんにん
お お わだ う そだ さい かいぐんげんえきし がん にゅうたい どうじ ていきつれんしゅうせい
大和田に生まれ育ち、17 歳にて海軍現役志願、入隊と同時に偵察練習生
(よ かれん ぜんしん) として くんれんご しょうわ ねん し な じ へん ぼつぱつかんこうばくげき さんか
(予科練の前身) として訓練後、昭和 12 年支那事変勃発漢口爆撃に参加、
だいとうあせんおよ しょうわ ねん がつべいこくはつこうしゅう もよう せんご
大東亜戦及び昭和 17 年 9 月米国初空襲をなす。そのときの模様は戦後
60 ねんいじょう た ふうか き
60 年以上も経つとだんだん風化してほとんど聞かれなくなった。そこ
で、どのような方法 ほうほう くにしゅう ほんにん にっき
で、どのような方法で空襲したのかを本人の日記によりまとめてみた。

くにしゅう せんすいかん どうさい こがた きやしや
空襲は潜水艦に搭載できるような小型で華奢にできていて、もちろんス
ピードは おそ きじゅう みりめーとる せんかいきじゅういつてい
遅いし、機銃は 7.7 耗 (ミリメートル) の旋回機銃一挺だ
けの がんぐ ひ こうき めいしやう ぜろしきこがたすいじょうていさつき よ
玩具のような飛行機だったが、名称だけは零式小型水上偵察機と呼
ばれていた。

ミッドウェー かいせん こうくう ぼかん げきちん いちだいだげき う かいぐん
ミッドウェー海戦で航空母艦を撃沈され一大打撃を受けた海軍は、
せんせい ばんかい せんすいかんどうさい ひ こうき ばくそう けんきゅう すす
戦勢を挽回するため潜水艦搭載飛行機に爆装する研究が進められていた。
とうじ おおがたせんすいかん いごう せき き どうさい
当時大型潜水艦は伊号として 9 隻が 1 機ずつ搭載していた。

まず、最初に さいしよ ばくそう い ごう ひ こうき そうじゅう ふじたへいそう
爆装されたのは伊 25 号の飛行機で、操縦は藤田兵曹、
ていきつじん おくだ にとうへいそう ふたりの そうび きじゅう むせんき
偵察員は奥田二等兵曹の二人乗りで、装備は機銃と無線機だけである。
せんすいかん ひ こうき じゅんこう きろめーとる ぜんそくりよく きろめーとる
潜水艦の飛行機は巡航 180 耗 (キロメートル)、全速力 250 耗

(キロメートル)で たいくうじかん じかんくらい てきちふか はい
滞空時間は 4 時間位のため、どうしても敵地深く入り
こんで、てきぜん せんすいかん かくのうこ だ くみた しゅうてん
敵前で潜水艦の格納庫から出して、組立てだ、試運転だ、カタ
パルトでの しゃしゅつ きとう ひ こうき しゅうよう かんばんじょう ぶんかい
射出だ、帰投する飛行機をデリックで しょうよう かんばんじょう ぶんかい
収容して甲板で分解
して かくのうこ はんによう あし おそ せんすいかん じさつてき こうどう めいれい
格納庫に搬入する。足の遅い潜水艦では自殺的な行動だが、命令で
あれば したが えない ひ こうき くみた はっしん きちやく しゅうよう じかんたんしゅく
従わざるを得ない。飛行機の組立て、発進、帰着、収容の時間短縮
のため、ち くんれん まいにち く かえ
血のにじむような訓練を毎日繰り返した。

とうしよ ぜんき くんれん じかんはん よう れんぞくくんれん けつ か しゅつこう
当初は前記の訓練には 1 時間半を要したが、連続訓練の結果、出港す
る ころ ぶん で き と き ぐんれいぶ しゅつげきめいれい で
頃には 30 分で出来るようになった時、軍令部から出撃命令が出た。

ばくげきもくひょう　ぐんじゅこうじょうなど　おも　もくひょう　たいりく　しんりん
爆撃目標は軍需工場等かと思っていれば、目標はアメリカ大陸の森林だ
という。何故森林を爆撃するのは、元駐米アメリカ大使館付武官だっ
た軍令部副官の発案で、米西海岸は森林が多く、しかも原始林であるた
め一番恐れられるのは山火事だからである。一度山火事が発生すると
消火のしょうがない。熱風が近くの街に吹き寄せてくるので、避難しな
ければならない住民にとっては真につらいことである。特にシアトル
地区に大木がある州政府は、この上空を飛行禁止区域にした。もし
飛行機の墜落があつて火災でも起こしたら大変だからである。従つて
敵地の苦手な森林への焼夷弾の投下によって、火災を起こせば効果絶大
であるとの説明だった。

また、日本の飛行機が米本土を爆撃したとなると敵の志気を沮喪させ
る効果もあると言われて勇躍昭和17年8月15日に出航する。

米本土に近づくにつれ荒天となり、8日間天候の回復を待つて浮上し
た。直に格納筒のドアが開かれ、85K焼夷弾2個が装着済の飛行機が
ロープをつけて滑走車の上に胴体が引き出され、左右の翼が取り付けら
れていく。プロペラも尾翼も同時に完備されていく。奥田兵曹は無線機と
機銃を装着する。他の整備長や整備士等はカタパルトの発射準備をする。
脚とフロートも直に取り付けられ、飛行機はカタパルト上に移され
試運転を開始、準備完了。エンジンを全速にすると、前任将校が赤色灯を
2～3回廻して下ろすと同時に、物凄い圧搾空気で飛行機が射出される。
この間25分位要したが、非常に長く感じた。

とにかく、滞空時間は4時間。片道2時間で目的地を爆撃するので、
羅針盤と時間は操縦担当、目的地の位置確認と後方警戒は偵察担当で
目的地上に焼夷弾を投下する。戦果は不明だが予定通り作戦は成功した。

しかし、作戦上の打電は敵に発見される恐れもあるので、打電はでき
なかったため、発艦させた潜水艦は浮上したまま帰投する飛行機を待つ

ていたことを聞く。

夜は明けて太陽が昇り、敵地がはっきり見える程になったが、機影は見えない。艦上で眼を皿のようにするが、どの方向から来るかわからない。

時間的に、もう音が聞こえてくる頃だが？

或いは、お供（米軍機）を連れて帰られたら大変だ。いろいろ予感が横切る搭乗員も、2人のために潜水艦と100余名の乗組員を犠牲にするわけにはいかない。最高速度250Kしか出ない両者の焦りは筆舌には表現できない待ち遠しさがあった。

でも、やがてその心配もなく一直線に飛行機は艦の直横に着水する。偵察員は吊上用のワイヤーを出す。追われているようにデリックの下へ急ぎエンジンを停止、偵察員がフックをかける。前任将校が信号の笛をピッピッと吹く。デリックのワイヤーに飛行機は巻き上げられる。飛行機は滑走車の上を下ろされる。作業員はフロート、翼、プロペラと次々と外し、尾翼も折り畳まれ、運搬車にロープがかけられ、レールの上を飛行機はスルスルと格納筒に納められ、重い格納筒のドアが閉ざすと「潜航用意」の命令と共に作業員が急いでハッチから滑り込み、人員確認後艦はどんどん沈下し、60Mで停止して初めて生きた実感が湧いた。戦果は不明だが、これが最初で最後の空襲となる。

本当に行ったの…？と聞く人も居るので、その状況を書きました。

3月10日 東京大空襲

木村 光雄

昭和20年3月10日は私にとって生涯忘れ得ぬ日です。当時の日本は、第二次世界大戦の末期でありサイパン島の日本軍が玉砕してからは米軍の重爆撃機B29の空爆が始まった。

小学生は田舎に疎開、中学生・女学生は勤労働員で工場へ、高校・大学生は徴兵猶予の制度停止によって学徒出陣で戦場への時代でした。私は、大学の1年生で入隊前でした。1学期は何とか講義を受けることが出来ました、2学期からは石川島造船所に、学徒勤労働員として旋盤工の仕事になった。

須崎弁天町の遊郭地に大きな「石川島須崎集団本部」と云う看板が立ち、日本大学・国学院大学・拓殖大学の学生3千人が集団生活で造船所に通った。

その内、段々学生達の気持ちも荒んできてトラブルや喧嘩なども始まった。教授も暇なのだから、せめて夜1時間だけでも講義してもらえないかと申し入れたら「この非国民何言うか」と拒否された。その内、妙な緊張感が漂い始め噂が流れ出した。憲兵が入り込んでいる。東條現総理暗殺計画が発覚、近衛前総理と中野正剛（東方会）の信奉者が拓大生の中に居る。それを憲兵が内定しているらしいと囁かれた。

この噂が私の耳に入った途端に、突然3大学の3千名に集団合宿生活解散が命ぜられた。

私は、須崎集団本部に移った時、拓大研究会の私設寮を閉鎖してしまったので住む所が無くなってしまった。やむを得ず、知り合いになったばかりの布施さんに頼み、下宿を探してもらった。そして、同じ寮にいた布留川静雄君と二人で近くの理髪屋の2階に居を移し、石川島造船所へ通った。

3月9日は、前日小雪の降った寒い曇り日だった。朝から風邪気味で頭が重かった。今日は1日休んで寝ていようかと思った。

しかし、佃島の埼玉屋へ行かなければ朝・昼・晩の食事がとれなかったので仕方なく造船所に出勤した、そして夕食を埼玉屋で済ませて帰り早々に寝てしまった。その晩も「空襲警報」が鳴っていた。その頃は毎日空襲があり警報が鳴っていたので気に留めず寝ていると、突然階下から大きな声がした。

「学生さん、今日はいつものと違う。早く起きて下さい。」

目を覚まし飛び起きて驚いた。真夜中だというのに昼間のように明るく、前の道路はお祭りのように群集がごった返していた。

同級生の布留川と二人、手当たり次第本などをリュックに詰め込み、表に飛び出した。

須崎弁天町は旧遊郭の街で、東京湾に面しており、一方は高いコンクリート塀、他の二方は広い深い水路に囲まれた街でした。

よその土地に行くには、三つの橋を渡らねばならなかった。群集は西の橋に向かって流れていた。だが、直ぐに西の橋は火が回り駄目、群衆は混乱しながら東の大門の方に流れた。しかし大門も既に火が廻り橋は渡れず混乱が一層ひどくなった。

そのとき、「木村さん!木村さん!」と必死に叫んでいる声が聞こえ、行ってみると布施さんの一家6人が居た。一緒に連れて行ってくれと頼まれた。友達達の布留川とは先に逃げろと其処で別れ、年寄りを庇いながら7人で東京湾の岸壁まで追い詰められた。

岸壁からはイナゴの大群のように東京湾に飛び込んでいった。

その時は、あの豪壮な二階建ての建物も燃えだした。火が振りかかって来た。「年寄りでは海に入れない。ここまでありがとうございました、章は男の子です。お願いします。」「いや、海しか逃げ場はない。」と話し

あ合っているときょうふうにあおられたほのおおそ海へ吹き飛ばされた。

およ泳ぐこともできざいもくまるたつかあしつきたるところがあった。

そこは、がんべきましたほのおさところそこは1列に並んだ17～18人が生き残ることができた。

そのときでもアメリカのB29がぶきみぎんいろよんきへんたいしょういだんすなまちほうとうか飛び去るのを見ていて口惜しくてこのままではぜったい死ねないとがんばっていた。

しかし人間はこんなに弱いものかとみているしかなかった。ほのおかいめんをなだめ出すと、まるたつかひとみなてはなう流してしまった。うつ伏せにぶあるあおむすいめんしたいう水面が死体で埋まってしまった。

わたしまえせおこどもすしははおやき私の前の背負われていた子供は直ぐ死んでしまった。母親はそれに気がつきせおひもとわたしだとははおやわたははおやなうみ付き背負い紐を解き、私は抱き取り母親に渡した。母親は泣きながら海にながてあ合わせていた。

そのうちかいめんくびちかきづまんちょうしずそのうち海面が首近くになっているのに気付き満潮で沈んでしまうのかあきらめかけたが、なんとかそこまでと止まった。

なんとかたすおもからだきゅうさむみずつめかんはじなんとか助かるかなと思ったら、身体が急に寒く水が冷たく感じ始めた。

も燃えるものは全て燃え尽きつかいめんくらふるひがしそら燃えるものは全て燃え尽き海面は暗くなり震えていると東の空からむらさきくろたいようのぼはじいといのいちれつなら紫がかった黒い太陽が昇り始めた。やっと生き延び、一列に並んでいた17～18人が助け合いながらがんべきよのぼおどろ17～18人が助け合いながら岸壁に攀じ登って驚いた。

すうじかんまえまったちがべつせかいめうつうご数時間前とは全く違う別の世界が目映った。動くものは何も無く、さくやぐんしゅうくろずみどうろさんらん昨夜の群集も黒炭のように道路に散乱していた。

いっしょに逃げ歩いたふせいっかだれみあ一緒に逃げ歩いた布施さん一家の誰も見当たらなかった。

平成9年、日本遺族会主催による中国慰霊友好親善訪問団の一員として、7月12日より19日まで東北班20名を以って北京へ乗り継ぎ、ハルピンから列車にて牡丹江へ。市内視察後、ハルピン市内を視察し、その後空路瀋陽へさらに大連に場所を移し各々の地にて慰霊祭を行った。最終日空路北京に戻り北京郊外視察を経て帰国した。

父小泉正平は、母、妻、9歳の子供を頭に5人の子供を残して昭和18年10月末、農家の麦まきの多忙の中赤羽を経て満州に出征し、昭和21年8月16日吉林省大橋県敦化にて戦病死となっているが、実際のところは、ロシア軍の捕虜となり爆弾始末の作務中に事故死のようだと当時の慰霊祭において追悼の言葉がありました。

ここで、その報告書に寄稿した文章を紹介いたします。

「本日、ここが、父が死んだ土地であろう地に来ることが出来ました。

思えば50数年前別れてから幾多の苦しみをお互い味わいながら、地元の皆様に励まされ、また、力強く生きることを教えられて来ました。

父の成された道筋を歩みながら、先祖の残された土地を有効利用にと、昭和49年野火止テニスクラブを設立し現在に至っております。

モットーは、人と人のふれあいを大切にと、経営をなす中で多くの友人知人に恵まれ10数年前より上海、北京の元老大会の出場の機会を持ち、また友人に勧められて始めたゴルフで4年前より、北京の国際元老ゴルフ大会に出場し、昨年、一昨年と団長を務めながら、異国の地に眠る父の墓参りに行ってきましたが、今回日本遺族会の慰霊友好親善訪問団の一員として、この牡丹江の地を踏むことが出来ました。父の教えや、私を育てて頂いた多くの皆様に感謝しながら、この60数年、地域に密着し

ほうしかつどう つづ
て奉仕活動が続けております。

よ ため ひと ため にちやどりよく かさ
世の為、人の為にと日夜努力を重ね、いくらかでも皆様のお役に立つ
しごとが でき ければ、ご ぶんがえ でき 出来るであろうし、またお互い住んでよか
ったと言われる まち 街づくりをしながら、わか ひとたち そだ 育てて行きたいと思ひ
ます。

こんな かつどう つづ 活動が続けていくであろう、私を見つめていてください。

みな なかよ 皆んな仲良くやっています。ごあんしん 御安心ください。

いちぎんぎん
一吟吟じます。

やすくに みや みたま しず
靖国の宮に御霊は鎮まるも おりおりかえ はは ゆめじ
折々帰れ 母の夢路に

がつ 14 日 ぼたんこう
7月14日 牡丹江にて」



ついでしん へいせい ねん がつ にち にち こうせいしょう ちゅうごくとうほく ちく ゆうこう
追伸、平成17年9月7日より15日に、厚生省の中国東北地区友好
ほうちゅうだん さんか けつてい こんど めい ちち しぼう す
訪中団への参加が決定し、今度は8名にて父の死亡、また住んでいたで
あろう敦化地区の慰霊巡拝は専用車にて市内見学をする予定です。

まんてつ はたら わたし しょうわ ねん ちょうへいけん さ だい おつしゅ
満鉄に働いていた私は、昭和18年の徴兵検査で「第2乙種」であつたが、翌年4月に関東軍に入隊した。関東軍の苛酷な初年兵教育を受け、10月に「南方総軍に転属」の命を受けて門司港からマニラに向かった。船団は、五島列島沖に待機していた米潜水艦の魚雷攻撃を受け、「アッ」という間に15隻のうち3隻が各3,000名の兵員を暗闇の海にもくずにしてしまった。僚船は、全速力で現場から離れたのである。船団は、たびたび台風に遭遇して海水が甲板を洗ったが、「船倉に居ては助からない」と思い、びしょ濡れになって甲板上で寝起きした。

せんだん べいせんすいかん こうげき のが たいふう かあまり あと こう
船団は、米潜水艦の攻撃を逃れ、台風をおかして10日余の後マニラ港に接岸した。私たちが上陸して岸壁を離れると間もなく、米艦載機グラマン編隊が輸送船団に襲いかかってきた。私たちの後続部隊が乗っている船倉に爆弾が命中し、船倉は血の海だったとの話であった。

わたし まんてつ つうしんぎじゅつ たずさ なんぽうそうぐんちよかつとくしゅ
私は、満鉄で通信技術に携わっていたことから「南方総軍直轄特殊情報部」で、通信機器の整備に当たった。この部隊は、アメリカ機動部隊の交信を傍受して暗号を解読し、これを襲撃させるのに役立てることだったが、レイテ戦での敗北後のこの頃は、特攻（飛行機による）への情報提供が主だったようだ。私たちの部隊は、間もなく比島方面軍山下兵団に編入になった。

とう ぐん じょうりく しれいぶ
ルソン島に、いよいよマッカーサー軍が上陸するというので司令部がマニラから北方の高地バギオに移ることになり、私たちの部隊も翌年1月に移動した。

じんこうすうせん べっそう さんざい かんせい ひ しょ ち すうまん
バギオは、人口数千で、別荘が散在する閑静な避暑地であったが、数万の日本軍陣地と化した。間もなく、リングイン湾沖に百数十隻の米船団があらわれ、上陸地点とバギオに米戦闘機、爆撃機が連日来襲し、家屋を

ことごとく^{や はら}焼き払ったので、日本軍は^{にほんぐん}防空壕^{ぼうくうごう}で生活し、^{せいかつ}砲爆撃^{ほうばくげき}を避ける
ことができたが、兵を^{へい もつと なや}最も悩ませたのは食糧^{しょくりょう}の欠乏^{けつぼう}であった。移駐した^{いちゆう}
わたしの部隊は400^{ぶたい}余名^{よめい}の将兵^{しょうへい}であったが、通信傍受^{つうしんぼうじゆ}の任^{にん}に当たって^あ
いたのは15、6^{さい}歳の少年軍属^{しょうねんぐんぞく}70^{よめい}余名^{よめい}であった。バギオの近く^{ちか}まで米戦^{まいせん}
軍隊^{ぐんたい}が迫った^{せま}というので、わたしの部隊も4^{ぶたい}月に撤退^{がつ てったい}したが、この間の^{かん}
2^{げつあま}か月余りの間^{あいだ}にこの少年軍属^{しょうねんぐんぞく}たちはことごとく餓死^{がし}してしまった。
少年^{しょうねん}たちは、防空壕^{ぼうくうごう}の中で、空^{なか}になった飯盒^{はんごう}を抱いて、誰^{だれ}に看取^{みと}られる
ことなく息^{いき}を引きとっていった。また、わたしの部隊^{ぶたい}の任務^{にんむ}も攻撃^{こうげき}のため
の情報収^{じょうほうしゅう}集^{しゅう}でなく、連^{れん}合^{ごう}国^{こく}の戦^{せん}争^{そう}指^し導^{どう}の情報収^{じょうほうしゅう}集^{しゅう}に変わったため、
隊員^{たいいん}をつぎつぎと戦^{せん}闘^{とう}部隊^{ぶたい}に転属^{てんぞく}させ、バギオ撤退^{てったい}時には数^{すう}十^{じゅう}名^{めい}に縮小^{しゆくしょう}
してしまった。

上陸^{じょうりく}した米軍^{まいぐん}は、豊^{ほう}富^ふな航^{こう}空^{くう}戦^{せん}力^{りき}に守^{まも}られた砲兵隊^{ほうへいたい}と戦車隊^{せんしゃたい}をもって
日本軍^{にほんぐん}の陣地^{じんち}を突^{とつ}破^ぱし、一^{いち}軍^{ぐん}はマニラ方面^{ほうめん}に、一^{いち}軍^{ぐん}はバギオを^{めざ}目指^めして攻^せ
め上^{のぼ}ってきた。彼^{かれ}らは、日本軍陣地^{にほんぐんじんち}で少^{すこ}しでも動^{うご}くもの(それは、反^{はん}撃^{げき}
る兵^{へい}や砲^{ほう})がことごとくなくなるまで砲爆撃^{ほうばくげき}を加^{くわ}え、焦土^{しょうど}と化^かしてから
進^{しん}撃^{げき}してくるのであった。

バギオを撤退^{てったい}し、アシン川^{がわ}をさかのぼり、キャンガン溪谷^{けいこく}の中腹^{ちゅうふく}で終戦^{しゅうせん}
を迎^{むか}えた。当時^{とうじ}隊長^{たいちよう}は大尉^{たいい}で、将兵^{しょうへい}、軍属^{ぐんぞく}あわせて9^{めい}名の少部隊^{しょうぶたい}で、サ
ンプランシスコやデリー放^{ほう}送^{そう}などによって日本^{にほん}が降伏^{こうふく}を申し入れたこと
を傍受^{ぼうじゆ}し、その4^か日後^ごに東京放^{とうきようほう}送^{そう}によってこれを確^{かく}認^{にん}し参謀部^{さんぼうぶ}にこれを
報^{ほう}告^{こく}した。

私たちは、バギオ撤退^{てったい}以後^い一粒^ごの糧食^{りょうしょく}も支給^{しきゅう}されず、現地^{げんち}調達^{ちようたつ}つま
り現地^{げんち}住^じ民^{みん}から強奪^{ごうだつ}せよという訳^{わけ}だった。当初^{とうしょ}は、山間^{やまあい}に棚田^{たなだ}が点々^{てんてん}と
あったが、保^ほ有^{ゆう}米^{まい}などはほとんどなく、農^{のう}民^{みん}の種^{たね}粃^{もみ}を強奪^{ごうだつ}した。さらに
奥^{おく}地^ちに入^いると棚田^{たなだ}もなく、主^{しゅ}食^{しょく}は「さつま芋^{いも}」であったが、日本兵^{にほんへい}はツ
ルを引^ひ拔^きき、芋^{いも}を食^くい、ツルまで食^くってしまったので、原^{げん}住^{じゅう}民^{みん}から激^{はげ}し

い憎悪^{ぞうお}を受けた。それらを食い^く尽くした日本兵^{にほんへい}は「南方^{なんぽう}シンギク」と称^{しょう}する雑草^{ざっそう}で餓^うえをしのいだ。貧農^{ひんのう}育ちの頑健^{がんけん}な私^{わたし}は、マラリヤでの病死^{びょうし}や餓^が死^しした戦友^{せんゆう}10余名^{よめい}の最期^{さいご}を見とどけたが、その氏名^{しめい}は忘^{わす}れてしまった。

私^{わたし}の古兵^{こへい}（上等兵^{じょうとうへい}）が、終戦^{しゅうせん}の4日前^{かまえ}、「アメリカに渡^{わた}って缶詰^{かんづめ}の研究^{けんきゅう}をする」と言^いって、部隊^{ぶたい}を離^{はな}れた。つまり米軍^{べいぐん}に投降^{とうこう}することを決意^{けつい}した。その直後^{ちよくご}、日本^{にほん}の無条件降伏^{むじょうけんこうふく}。米軍^{べいぐん}の観測機^{かんそくき}が飛来^{ひらい}して「天皇階下^{てんのうかい}の命^{めい}により日本軍^{にほんぐん}は降伏^{こうふく}した。日本軍^{にほんぐん}帰兵^{きへい}は、原隊^{げんたい}に復帰^{ふっき}して米軍^{べいぐん}に投降^{とうこう}せよ」と、対地放送^{たいちほうそう}した。米軍陣地^{べいぐんじんち}にたどりつかなかった古兵^{こへい}は、これを聞^きいて戻^{もど}ってきた。ところが隊長^{たいちょう}は、古兵^{こへい}に「日本軍^{にほんぐん}は降伏^{こうふく}しても軍規^{ぐんき}厳正^{げんせい}である。敵前逃亡^{てきぜんとうぼう}は、銃殺刑^{じゅうさつがい}だ。ここで自決^{じけつ}すれば戦死^{せんし}扱いにする。家族^{かぞく}に汚名^{おめい}をきさせるのか」と自決^{じけつ}を迫^{せま}り、ついに決意^{けつい}させた。古兵^{こへい}は自分の死体^{したい}を埋^うめる穴^{あな}を掘^ほり、溺^{ふち}に座^{すわ}って、拳銃^{けんじゅう}一発^{いっぱつ}で絶命^{ぜつめい}した。銃創^{じゅうそう}から流れ落ち^{なが}た血^ちの色^{いろ}が今^{いま}でも忘^{わす}れられない。これが軍規^{ぐんき}だ。

この戦争体験^{せんそうたいけん}が、82歳^{さい}の今日^{こんにち}でも「平和^{へいわ}を守る^{まも}闘^{たたか}いは戦争^{せんそう}より楽^{らく}だ」と平和運動^{へいわうんどう}に私^{わたし}をかりたてている。



[はじめに]

しょうわ ねん がつ か ごぜん じ ふん いっしゅん せんこう とも おお ひと いのち
昭和20年8月6日午前8時15分、一瞬の閃光と共に多くの人の命
うば たてもの はいじん か こうりょう まち さんじょう ひつぜつ
を奪い、建物はことごとく灰塵と化し荒涼たる街とした。この惨状は筆舌
つく
に尽しがたいが、原爆投下から60年、世はこの記憶が薄れつつある。

げんばく たいけん うん よ い の わたしたち げんばく むざん こうせい つた
原爆を体験し運良く生き延びた私達が、原爆の無残さを後世に伝える
せきむ おも ふで
責務があると思い・・・筆をとる。

[その時の広島市]

ひろしまし おおたがわ しゅりゅう し ほくぶ かわ ぶんりゅう さんかくす
広島市は、大田川を主流とし、市北部より7つの川に分流した三角州の
とし せいりゅう かわ めぐ ふこうめいび まち
都市であり、清流の川に恵まれた風光明媚の街であった。

ぐん と しだん しだんなど へいきしょう ひふくしょうとうぐんかんけい しせつ
また、軍都で、5師団、11師団等があり兵器廠、被服廠等軍関係の施設
おお うじなこう おお へいし せんじょう しゅっこう い
が多くあった。そして宇品港からは、多くの兵士が戦場へと出港して行っ
た。

ひろしまし げんばくとうか しょういだん ばくだん とうか かんさいき きじゅう
広島市は原爆投下まで焼夷弾も爆弾も投下されず、艦載機による機銃
そうしやていど
掃射程度であった。

[その時の私]

ひばくとうじ わたし ねんれい まん さい きゅうせいちゅうがく ねんせい せんじ
被爆当時の私の年齢は、満19才であった。旧制中学(5年制)を戦時
くりあ そつぎょう ぜんねん ねん がつ そつぎょう どうきゅうせい しがんいり とも しょうねん
繰上げ卒業で、前年17年12月に卒業、同級生には志願入した友、少年
こうくうたい よ かれん い とも だいとうあせんそうぼつぽつ ねんめ
航空隊(予科練)に行った友もいた。大東亜戦争勃発1年目であった。

とうじ こくみんかいへい さけ とくべつ りゆう ものいがい みなぐんかんけい ぐんじゅ
当時「国民皆兵」が叫ばれ、特別の理由のある者以外は、皆軍関係、軍需
こうじょう しゅうしょく わたし ていこくへいき にゅうしゃ ぶんこうじょう はいぞく
工場への就職であった。私は「帝国兵器」に入社、分工場に配属され
た。そこは福島川沿いにあり、原爆投下中心地よりわずか西へ1.7キ
ロメートルの所であった。

とうじわたし ちち ちゅうごくてんしん ぐん しごと じゅうじ ふたり あに にゅうたい はは あね
当時私の父は、中国天津で軍の仕事に従事、二人の兄は入隊、母と姉
めい おとうと がくどうそかい せわやく ぐんぶ そかい
姪は弟の学童疎開の世話役として郡部に疎開していた。

わたし こうじょうちやう いえ せ わ
私は、工場長の家でお世話になっていた。

せんこう
[閃光]

その日は雲一つない夏の暑い日であった。8時朝礼を終え、私は6尺
せんばん む
旋盤に向かい、いつもの様に作業を開始した。

8時15分、魔の閃光が走った。それは写真を撮るときの、マグネシ
ウムを間近から焚いたような、強烈な閃光であった。間をおかずして、
こうじょう とうかい わたし ずじょう なに らっか だぼく のうしんとう いしきふめい
工場は倒壊し私の頭上に何かが落下し、打撲で脳震盪となり、意識不明
となってしまった。永い時間ではないと思う、回りから「助けて」「痛い、
いた
痛いよ」の叫声びで、意識は回復した。

こうじょう こめ ちょぞうそうこ ぞうかいちく たてもの こうぞうぶざい がんじょう はり
工場は、もと米の貯蔵倉庫を増改築した建物で、構造部材は頑丈で梁に
はシャフト、ベルトが縦横に取り付けてあった。これらの下敷きに私は
なっていた。どのようにして這い出したか記憶はない。腕ぬぐいしたら血
と埃と汗で、袖はべったりと異様な色に染まった。脱出したら既に軽傷
の男性4・5人の仲間が救出していた。私も加わった。一人の女性は頭
に大怪我をしていた。また、一人は腰に梁が横たわり、皆で持ち上げた
が落下物が絡んで救出できない、助けなければ、「鋸を借りて来る」と、
わたし どうろ で
私は、道路に出た。

あぜん しちゆう たてもの すべ とうかい わず のこ
咄然。市中の建物は総て倒壊し、ビルが僅かに残るのみ、「よくもこん
なに爆撃したな」と思った。(その時は原子爆弾という言葉すら知らなか
った)

ほんしゃ きゆうえん もと こうじょうちやう わたし い かわざ みち なん かの
本社に救援を求めに工場長と私で行くことにし、川沿いの道を南下の
とちゆう そら むらさきいろ いよう くもゆ ゆうだち おおつぶ あめ ふ そそ
途中、空が紫色の異様な雲行きとなり、夕立のような大粒の雨が降り注
いできた。この雨をシャワー替わりに顔や衣服の汚れを流した。この雨が
あと い ほうしゃのう くろ あめ し
後で言う放射能の黒い雨とは知るよしもなかった。

みち みず もと ひと かぞく な よ ひと いきた ひと おお よこ
道には、水を求める人、家族の名を呼ぶ人、息絶えた人が多く横たわ
っていた。何の救助も出来なかった事が、今も心残りである。

ふくしまばし たもと き しが い に い ひとひと なが ぎょうれつ で あ
福島橋の袂に来たら市外へ逃げて行く人々の長い行列に出逢った。そ
すがた ぜんしん おおや けど て まえ つき だ て さき や ひ ふ た さ
の姿は全身大火傷をし、手を前に突き出し手先から焼けた皮膚が垂れ下
がった人、4千度の熱線を受け服はボロボロとなり 裸同然の哀れな姿の、
ひと ひと ざん ざん き の う ひろしま おもかげ あびきょうかん ちまた か
人、人、惨、また惨、昨日までの広島の面影はなく阿鼻叫喚の巷と化し
た。

ごじつ わたし い う ところ もど ぼうぜん わたし からだ ー らっ か
後日私が生き埋めになった所に戻って、呆然、私の体に落下するは
ずの梁等は旋盤が支えていた。奇蹟か幸運か、旋盤が私の命を救ってい
たのだ。おおけが じょせい ま いきた よくじつちか がっこう だ び ふ
大怪我した女性は間もなく息絶えた。翌日近くの学校で茶毘に伏
した。

いっぽうこし いた ひと しが い ちりょうしょ つ い にちご ようす
一方腰を傷めた人は、市外の治療所へ連れて行き、2・3日後、様子を
み すがた な
見にいったが、そこにはもう姿が無かった。

[うすれゆくきおく]

がつ か しんぶん き じ いま こくないがい げんばくひがいしや まんにん
8月6日の新聞の記事によると、「今、国内外の原爆被害者は26万人
あま へいきんねんれい さい こ げんばく し ぼうしや ひろしま
余りで、平均年齢は73歳を超えた。原爆での死亡者は、広島で24
まんにんあまり ながさき あ まんにんあまり ひろしま ひばく げんばくいれい ひ おさ
万人余、長崎と合わせると37万人余、広島で被爆し原爆慰霊碑に納め
られた人はこの1年で5千余人」とある。

ひばく ごしゅうせん ねん すぎさ せんそう くる むな し
被爆後終戦となり60年が過去った。戦争の苦しさや空しさを知らず、
げんばく きょうふ ひさん し せだい たいはんいじょう し げんざい
まして原爆の恐怖や悲惨を知らぬ世代が大半以上を占めている現在、こ
ぶん なに さんこう ねん ふで お
の文が何かの参考となることを念じつつ筆を置く。

わたし しょう わ ねん
私は昭和5年（1930年）山口県岩国市に生まれました。その頃は
たいへん ふ けい き
大変な不景気だったようです。失業者も多く、一般に貧しく苦しい生活だ
ったそうでラジオも無い家庭が殆どだったと聞いております。

しょう わ ねん
昭和7年（1932年）に支那事変が始まり、続いて、昭和16年
（1941年）に第二次世界大戦へと突入して行っただけです。敗戦の色が
こ しょう わ ねん
濃くなった昭和19年（1944年）旧制中学三年生の秋から、私達は
がく と どういん いわくに りくぐんねんりょうしょう こうじょう どういん
学徒動員で岩国の陸軍燃料省という工場に動員されて、ドラム缶を
つくっていました。その時、旧制女学校の生徒も動員されていて隣の工場
で我々が作ったドラム缶を洗浄したり、乾燥させて塗装をしていました。
が、ある日突然、米軍のB29に爆撃されて二名の女学生が亡くなったよ
うです。当時は夫婦以外は男女が共に行動する事は絶対に許されていな
いので詳しい事は解りません。又当時、軍の秘密が漏れたら大変厳しい罰
を受けましたから…

よく ねん
翌20年（1945年）4月からは岩国海軍航空隊に動員されて滑走路
のかくちょうこうじ じゅうじ
の拡張工事に従事していました。そして、その年の7月13日に悲劇が
おこ ころ
起りました。その頃はもう度々、米軍の空襲を受けていました。その日も
グラマン戦闘機の機銃に襲われ広い滑走路を逃げ廻っていました。航空
しれいとう
司令塔からジグザグに逃げろ!!と頻りに叫んでいました。が…

くうしゅう お てんこ と さんめい た ひろ かつそう
空襲が終わり点呼を取ってみると三名ほど足りません。広い滑走を
みわた
見渡すと、あっちこっちでうつ伏せになって倒れているのです。おい!!
くうしゅう お さけ ちかよ まっか ち うみ
空襲はもう終わったぞ!!叫びながら近寄ってみると真っ赤な血の海に
たお
斃れていました。

ひとり のうみ そ とびち あたま あ ふたり だんがん せなか
一人は脳味噌が飛散って頭が有りませんでした。二人は弾丸が背中か
らお腹に突き抜け大きな穴があいていました。

はい おどろ みわた かぎ ちへいせん や の はら みぎてえんぼう げんぱく
入って驚きました。見渡す限り地平線まで焼け野原で、右手遠方に原爆ド
ームが立っていて、斜め左手遠方に福屋デパートの鉄筋に少しコンクリ
ートの壁がついて残っているのが見えました。立木といえど二米位の
高さで黒焦げになり、所々にポツン、ポツンと立っていました。

はっきりした場所は良く解りませんでした、この辺りではないかと
焼跡に参りましたが、影も形もありません。唯、黒い灰だけが残ってお
り、一家は全滅でした。但し叔父は南方に召集され留守だったので
助かりました。

叔父は養子なもので、姑と嫁が亡くなっていました。又子供が未だ
授かって無かったので本当に救われました。焼跡の灰を持ち帰り、仏壇に
供え、しっかり御供養させて戴きました。戦後2年位経って叔父は復員し
て参りましたが、一年位は腑抜けの様な状態でした。

敗戦直後の昭和20年(1945年)9月の終わり頃には米軍が進駐し
て来ました。その頃はもう日本の軍人は皆除隊となり、残務整理に
3、40名残っていたでしょうか。そうした中、旧海軍が山の麓の大きな
隧道に隠していた銃機や爆薬の処理を進駐軍が始めました。米軍の看視
の下、その使役に老人や少年が刈り出されたのです。その時は未だ海外に
派兵された軍人達は復員していない為、老人や少年が刈り出されたので
す。隧道の中から外のトラックまで二人で運び出して積む仕事ですが、
なにしろ銃や爆薬が入った箱は相等重いものですから、途中で休んだり、
よろけて箱を落としたりしました。当時は食べる物がものでしたから
無理ありません。すると、早くしろ！とあのデカイ軍靴でお尻を蹴飛ば
して笑うのです。余りの悔しさに…。

その後何日かして、頭が痛いとか腹が痛い、とか云って出なくなりま
した。するとどうです、警官を連れて一緒に刈り出しに来るのです。日本
の刑事が就いて来て同胞である日本人を刈り出す。おまけに最後には

診断書を出せ！と云うのです。

実に情けない思いをしました。 終り



わたし ねん
私の 81 年

たなか さだいち
田中 定一

わたし たいしょう ねん がつ にち じもと う お お わ じんじょうこうとうしょうがっこう
私は大正 13 年 5 月 15 日に地元生まれ、大和田尋常高等小学校に
にゅうがく しょうわ ねん がつまつこうとうか そつぎょう
入学し、昭和 14 年 3 月末高等科を卒業しました。

ねんせい とし し な じ へん ぼつぱつ よ まんもうかいたくだん しょうねんこうくうへい
6 年生の時に支那事変が勃発したため、世は満蒙開拓団か少年航空兵
ある しょうねんせんしやへい よ か れん し が ん ぼしゅう しんぶんざつし おお と あ
或いは少年戦車兵、予科練志願の募集が新聞雑誌に大きく取り上げられ、
わたし のうぎょう ところ しょうねんこうくうへい あこが はじ ちゅうがくこうぎろくなど
私も農業をやりといいながら心は少年航空兵に憧れ始め中学講義録等
を か べんきょう はじ ひる ま のうぎょう よる や は ん ずいぶんべんきょう
買って勉強し始めた。昼間は農業、夜は夜半まで随分勉強した。たま
たま しょうねんこうくうへいぼしゅう あんない み おや ないしょ し が ん し が ん がっか
たま少年航空兵募集の案内を見て親に内緒で志願した。志願しても学科
で お おも ごうかく さいようつうち き おや
落ちるだろうと思っていたら合格の採用通知が来てしまった。親に
むだん し が ん さいようつうち くち だ ひ
無断で志願したためなかなか採用通知について口に出せず、さりとて日
に ひ にゅうこう ひ せま おや しんきょう はな ぐんたい や
日に入校の日が迫るため親に心境を話したら、「軍隊のことだから止む
え ことば あんど しょうわ ねん がつ いたちたちかわりくぐんこうくう
を得ない」という言葉に安堵して、昭和 15 年 10 月 1 日立川陸軍航空
がっこう にゅうこう は
学校に入校を果たした。

とう じ ちょうせん たいわん からふとなど し が ん き だい きせい ななが
当時は朝鮮、台湾、樺太等からも志願して来た。第 6 期生として七ヶ
ちゅうたい へんせい にゅうこうご じ かん げんかく ごぜんちゅう ぶんかんきょうかん がっか
中隊に編成された。入校後は、時間は厳格で午前中は文官教官により学科、
ご ご ちゅうたいちよう い か か し かん し どう じゅつかくんれん しよほてきくんれん はじ
午後は中隊長以下下士官の指導で術科訓練、初歩的訓練から始まり、
たいそう けんどう いちおうぐんじん きょうよう え いちねん そつぎょう じょうきゅうこう しんがく
体操、剣道まで一応軍人としての教養を得て一年で卒業、上級校へ進学。
わたし ところざわりくぐんせい びがっこう にゅうこう どう き そうじゅう くまがや つうしん み と
私は、所沢陸軍整備学校へ入校した。同期でも操縦は熊谷、通信は水戸
かく ひ こうがっこう てんこう じょうきゅうこう き ごぜんちゅう がっか ご ご じゅつかく
各飛行学校へ転校になる。上級校へ来ても午前中は学科、午後は術科で
ぜんこう すこ たか きょういく う にゅうこうご ま がつ か
前校より少しランクの高い教育を受けた。入校後間もなく、12 月 8 日
だいとうあせんそう はじ こっ か そうどういんれい せいかつ ひ し せんそうすいこう
大東亜戦争が始まり国家総動員令により生活も引き締められ戦争遂行へ
きび
厳しくなった。

しょうわ ねん がつ か こうくうきねん び こうくうたいし が ん せんでん か きょうどほう
昭和 17 年 9 月 20 日航空記念日に航空隊志願の宣伝も兼ねた郷土訪
こう きんけん しゅつしんしや けんのう ひ こう き きょうどほうもん ひ こう きよか わたし
行が近県の出身者のみ献納された。飛行機で郷土訪問飛行が許可され私
えら はんちよう そうじゅう ところざわひこうじょう と た き ま くろ や ね
も選ばれた。班長の操縦で所沢飛行場を飛び立ち、機は間もなく黒い屋根

のコの字型の大和田小学校の上空に近づくに従い、平林寺大門通り上空より高度を下げ始め校庭上空300米(メートル)位まで降下した。校庭には「バンザイ」と人文字が書かれ旗を振っているのが見えた。嬉しかった。「皆さんありがとう」と何回も叫びながら飛行機は上昇し、翼を左右に振りながら旋回し、また大門通りから降下し児童達に3～4回繰り返しながら所沢飛行場へ戻った。生涯の思い出である。その後8か月間、専門の飛行機整備訓練を受け昭和18年5月末に卒業し北朝鮮平壤航空隊へ転属。5か月間隊務勤務を経験し母校の所沢整備学校へ出校して後輩の指導中に終戦を迎える。

終戦で帰郷し兄が外地から帰るまで農業を手伝う。昭和21年4月に兄が北支から帰還し、共に農業を手伝っているうちに近所の人の世話で結婚することになり結納まで終わったが、戦場暮らしで疲れていたのか9月になると胃潰瘍を患い今なら手術して充分治ったと思うが、物不足のため治療もままならず19日に死亡してしまった。

親は兄の遺言だからと言って結納を取り交わした人との結婚を強く望まれたのでやむなく21歳で同年12月7日に結婚式を挙げた。翌22年12月2日に長男が産まれた。妻は子に乳をあげようとしたがまだ飲むことを知らず、飲み始めようとしたら「妊婦が丹毒のようだから授乳は駄目だ」と言われ子はやむなく砂糖水を飲ませながら貰い乳に歩き回る。片方の妊婦は闇のペニシリンを買って治療したが、手遅れもあって遂に12月7日に死亡。結婚してちょうど1年だった。子供は払い下げられた脱脂乳と自家製の摺り粉等を混合して何とか凌いだが栄養不良は免れず、昼夜を問わず泣く日々が続く医者を始めあちこちの祈願も効き目なく困り果てていたら幸手町に名医が居ることを聞き哺乳瓶に温めた乳を懐に、子供を背負って浅草から電車にて行く。車内は買出人で満員である。その中で哺乳をしていたら「可哀相に」と同情してくれたのが辛か

った。でも、その薬くすりと指導しどうが良かったのか、日ひに日ひに少しすこずつ元氣げんきになったが祖母そぼは苦勞くろうしたと思う。その後、再婚ごさいこんして一男二女いちなんにじよに恵まれたが次女じじよが小兒麻痺しょうにまひに罹病りびょう（ポリオ予防よぼうはなかった）し、妻つまは入院にゅういんの面倒めんどうから退院後半年間たいいんごはんとしかんも和光国立病院わこうこくりつびょういんへ自転車じてんしゃにて通院つういんした。一旦いったんは正常せいじょうの体からだに治なおったが5才さいの時再発ときさいはつ、咽喉麻痺いんこうまひにて1日いちで亡なくなり妻つまはかなりショックうを受けた。5月がつに父親ちちおや、10月がつに子供こどもと2回かいも葬式そうしきを出だしながらも頑張がんばった。他ほかの子供こどもも高校こうこうへ進学しんがくしようやく平和的へいわてきな家庭かていになる。

しょうわ ねんしせいし こうごはつ しぎかいせんきよ とうじにいざだんち にゅうきよ
昭和47年市制施行後初の市議会選挙があり当時新座団地に入居して
3年目ねんめで団地周辺だんちしゅうへんの休耕田きゅうこうでんで農園指導のうえんしどうしていた私わたしに是非出馬ぜ ひ しゅつぱをとの聲こえに、自信じしんがないだけに悩なやんだ末決心すえけっしんした。でも、何とか当選なん とうせんを果たした
が、当選とうせんしてからというものは、家族全員かぞくぜんいんを議員生活ぎいんせいかつに巻き込むことにな
り妻つまは平素へいそと変わらない付き合かいをしていても少しすこ気位きぐらいが高たかくなった
と陰口かげぐちを言いわれたりしたため、妻つまの不満ふまんも大變たいへんなものでありました。数期すうき
務めつとるにつれ理解りかいと協力きょうりよくで議員活動ぎいんかつどうもレールのに乗るようになりました。
こういん や ねん ねんけいか なか ぎちよう かい つと ぶ じ
光陰矢のごとし、10年、20年経過なかする中で議長ぎちようを3回かいも務め、無事6
期き24年務めねんつとました。任期終了後にん き しゅうりようごも2、3の公務こうむを任命にんめいされ、81才さいの今いま
も市政しせいのために頑張がんばっております。

しょうわ ねん が がつまれ
昭和14年6月生

わたし さいぜんご とくせんそう し ちちきょうだい にん へいたい ないち
私は5、6歳前後の時戦争を知りました。父兄弟3人は兵隊（内地・
がいち またひとり かいぐん やましる かいきょう ちん
外地）又一人は海軍で山城にのっていたそうです。フィリッピン海峡で沈
ぼつ
没したそうです。

つぎ しょうわ ねんぜんごひるま こと あま わたしたち かぞく
次に昭和20年前後昼間の事は余りおぼえていません。私達の家族は
はは さい おば さい わたし さい じじよ さい さんじよ さい にん
母35才、叔母17才、私5才、次女3才、三女1才の5人の生活でし
た。よる ひとねい まいよ よう
た。夜になり一寝入りすると毎夜の様にサイレンが鳴りラジオでは警戒
けいほうはつれい あいず まくらもと ぼうくう お
警報発令の合図です。枕元にシャツ、モンペ、防空ズキンを置き、ねえ
ちゃん したく こども びんかん
ちゃん仕度するよと子供ながら敏感になっていました。ねえちゃんは
さんかけい しろ でんき かさ くろ ぬの ま そと
三角形の白い電気の傘に黒い布を巻きつけて外にあかりがもれない様に
しました。もれていると でき 敵にやられるからです。わたし あまど あな そと
をのぞくと空はなんとも言えない明るさ。B29がもえたり照明弾がおち
てきたり ぎんがみ たんざく よう
銀紙の短冊の様にパラパラおちてきました。また、はたけ まえ
松林がしげっていて、そこに かんさいき ていさつ なんき き
艦載機が偵察に何機も来ていました。この様
ひ みっか かんぐらいつづ
な日が三日間位続いていました。

のこ すく じんせい に ど あじ へい わ おく おも
残り少ない人生二度と味わいたくなく平和で送りたいと思います。

とうきょうあらかわく おぐまち す わたし しょうがく ねんせい
東京荒川区尾久町に住んでいた私は、小学3年生、1945年（昭和
20年）3月10日未明、東京大空襲にいました。

はは あね あにいもうと にん も ひ うみ なか ほのお ほうこう さが
母と姉、兄妹の8人で、燃える火の海の中を炎のない方向を探して
ひっし に へっし へっし へっし へっし へっし へっし へっし
必死で逃げました。荒川の対岸に橋を渡ろうとすると、警察官が「渡る
な」と叫んだ。しかし、逃げる人があとからあとから続き、誰彼となく
けいさつかん かわ つ お はし わた
警察官を川に突き落とし、橋を渡った。

そこは、いえ もない かせん じき かわ なか や い
そこは、家もない河川敷であった。川の中には焼けただれた生きている
ひと し ひと からだ う かぞく わ
人、死んでいる人の身体がたくさん浮いていた。それでも家族が別か
れる こと いっしょ こうどう い の おも
れる事なく、一緒に行動していたので生き延びた思いをかみしめた。

つぎ ひ す いえ もど み や なに や
次の日住んでいた家に戻って見ると、すべて焼けこげて何もなく、焼け
の はら とお み
野原であり遠くまで見える。

やま て せん たばたえき うえの えき み とうきょう いっぱん ひとびと
山の手線の田端駅や上野駅のホームが見える。東京では、一般の人々が
すうじゅうまん にん し ひろしま ながさき げんぱくとう か しゅうせん
数十万人死んでいる。そして、広島、長崎へ原爆投下をされ終戦となり、
これで320万人の命が失われ、アジアでは2,000万人が侵略戦争
で犠牲となった。

せん ご ねん やすくにじんじゃさんぱい けんぽう じょう か うご ふたた せんそう
戦後60年、靖国神社参拝、憲法9条を変えようとする動き、再び戦争
をする国にさせない為に、あの戦争で失われた命から教訓を引き出すべ
きではないでしょうか。





わたし へい わ おも
私が平和について思うこと

ちん びん
陳 萍

にっちゅうせんそう ねん た きんちよう いま にっちゅうかんけい
日中戦争から60年が経ちました。緊張している今の日中関係は、あ
る意味では、平和ではない状態が続いています。これからお互いにどう向
き合い、どのように仲良く付き合っていくのか？

わたしたち ひ と り せい き か だい かんが
これは私達にとって一人ひとりの21世紀の課題として考えなけれ
ばならないと思います。

ねんまえ ちゅうごく にほん あいだ たし いちじてき ふ ころ か こ
60年前、中国と日本の間、確かに一時的な不幸な過去がありました
が、戦後、それを埋めるために70年代に私達の先輩で中国と日本の
指導者、両国の国民の努力によって、日中国交正常化を実現させました。

たが ゆる あ ぶん か そんちよう あゆ よ みらいしこう
お互いに許し合い、それぞれの文化を尊重し、歩み寄ることと未来志向で
お互いに努力すれば平和と友好の関係を築けると 생각합니다。ここでは

ちゅうごく い だい ひ と しゅうおんらいしゅしょう こと ば いんよう いただ にっちゅう
中国の偉大な人だった周恩来首相のお言葉を引用させて頂きます。日中
関係について、30年前に周恩来首相は、このようにお述べになりました。

か こ か こ わか せ だい う
“過去は過去としなければならない、それを若い世代に受けついで
ならない。”私達はこのような寛大の心を持って付き合っていくべきで
ない。”

あらそ へい わ みち かなら ひら しん いちいたすい りんぼう
や争うことなく、平和な道が必ず開けると信じます。“一衣帯水”の隣邦
として私達皆が日中友好のかけ橋になって、平和の願いを果たして行き

ましょう。

へいわ について おも
平和について思うこと

中学2年生 うらかわ み さき
浦川 未早

いま わたしたちにほんじん かいてき せいかつ おく
今、私達日本人はとても快適な生活を送っています。しかしむかし ひろしま
ながさき げんぱく お ひとびと くる
や長崎に原爆を落とされ、人々がとても苦しみました。

そこでこれからの日本は、にほん せかい くにぐに ゆうこう ふか へいわ せかい
世界との友好を深め、平和な世界に
してほしいと思います。そして、もうに ど せんそう お たの くに
二度と戦争の起こらない、楽しい国
になっていけばいいと思います。

へいわ について
平和について

中学2年生 さいとう のどか
斉藤 のどか

わたし ふだん ちょうしよく た ちゅうしよく た ゆうしよく た
私たちは普段、朝食を食べ昼食を食べ、夕食を食べます。おやつな
どのかんしよく た ひと おお おも
どの間食を食べる人も多いと思います。しかし、せかい め む
と、あさ ひる ばん しょくじ ひとびと おお わたし とし
朝・昼・晩の食事さえもできない人々も多いです。私たちくらいの歳
でせんそう い ひと わたし
戦争に行く人もいます。私たちにとってあたりまえのことができない
のは、ほんとう につらい と思います。『へいわ』はとってもいいこと だ と思います。



60年前に、原爆が落とされました。その中には広島もありました。

広島に原爆を落とした時のことを、テレビでやっていました。私は、
パパとママと私で見ました。

旅館をやっていて、お父さんもお母さんも死んでしまって、一番下の
弟と真ん中の女の子と、もうひとつ上の女の子と、一番上のお姉ちゃん
と暮らしていました。広島に、原爆が落とされると分かった日、沖縄に
行くことになった弟は、沖縄での戦争の戦いに行くために、機関車に乗
って行ってしまいました。でも真ん中の女の子は先生をやっているので、
行かなくてすみませんでした。お姉ちゃんの彼氏が行ってしまいました。だけ
ど一日早く、帰ってくると決めました。

でも、10分前ぐらいに原爆を落とされてしまったのです。その男の人が
そこに帰ってきた時、旅館の入口にあった石だけが目立っていました。
一番上のお姉ちゃんは、黒焦げになる前にとけてなくなってしまいました。
残ったのは、お姉ちゃんが寄りかかっていた石に、お姉ちゃんが座っ
ていたように、影がくっきり残っていました。真ん中の女の子は、焦げ
てなくなっていました。そのひとつ上の真ん中の女の子は、原爆ドーム
の一部が自分の上に、落ちてきて死んでしまいました。一番下の男の子は、
わかりません。

このテレビを見て、改めて、戦争はだめっと思いました。その戦争を
してから本当にアメリカは、日本に爆弾を落とさないで他の国から守っ
てくれるのか、本当に守れるのかが、心配です。これから戦争がないよ
うに祈るしかないのです。私は祈ります。

なつやす
夏休みに、いろんな戦争のテレビを見ました。なんで戦争をするのか分
かりません。ばくだん てっぽう おお ひと し
爆弾や鉄砲で多くの人が死んでます。やめてほしいです。
どの国の人、たの うれ くら せたらいいと思います。

ぼくのひいおじいちゃんは戦争でなくなりました。もし戦争がなかつ
たら、ひいおじいちゃんに会えていたのかな。せかいじゅう
世界中でおきている戦争。
いま くる
今も苦しんでいる人がいる。きっとぼくが思うように、もし戦争がなかつ
たらって思っている人がいると思う。ぼくは、ぼくがもっている全ての
ゆうき だ へいわ まも
勇気を出して平和を守りたい。ひいおじいちゃんも喜んでくれると思う。
あ
会いたかったよ、ひいおじいちゃん。

わたし　へい　わ　　おも
私が平和について思うこと

小学3年生　たけもと　あ　か　り
武本　明花里

わたし　　じ　へい　し　ょう　　にい　　わたし
私には、自閉症のお兄ちゃんがあります。私にとってもやさしくしてくれ
るお兄ちゃんが大好きです。

でも、　なか　　にい　　お　な　　しょうが　い　　ひと
中にはお兄ちゃんや、同じ障害をもった人をいじめたり、ばか
にしたり、じゃま者あつかいする人がいます。でも、お兄ちゃんたちは、
いじめられている意味がわかりません。だから、み　　わたし
見ている私はとてもつ
らくなります。どうしたら、みんなお兄ちゃんたちにやさしくなるのだ
ろうと、いつもおも　　おも　　おも
思います。

みんな　か　お　　ひと　　まえ　　おも
みんな顔がちがうように、いろんな人がいてもあたり前だと思ひます。
だから、しょうが　い　　ひと　　おも
障害のある人がいても、やさしくしてほしいと思ひます。みんな
がおも　　おも　　せ　　かい　　わたし　　へい　　わ
思いやりをもてる世界が、私にとっての平和です。

へい　　わ　　　ね　　が　　い
平和についての願ひ

小学3年生　やまもと　な　　つ　　ね
山本　夏寧

しん　　ぶん　　まい　　に　　ち　　かな　　　じ　　け　　ん　　お　　お　　わたし　　いえ　　ね　　え　　き　　ょう　　だ　　い
新聞やニュースで毎日悲しい事件が多く、私も家でお姉ちゃんと兄弟
げん　　か
喧嘩をよくしてしまいます。

ぼん　　ぼ　　う　　いえ　　き　　とき　　あ　　き　　も
お盆にお坊さんがおじいちゃんの家に来た時に、「ゆずり合ひの気持ち
でいれば喧嘩になりません。」とおっしゃっていました。

せ　　かい　　ひと　　び　　と　　やさ　　あ　　き　　も　　せん　　そう　　あら　　そ
世界じゅうの人々が優しいゆずり合ひの気持ちで戦争や争ひのない
へい　　わ　　ち　　き　　ゆう　　おも
平和な地球にしていけたらいいなあとおも　　おも
思います。

平和についての願い

小学4年生 福島 翔

昔は今とちがって戦争が行われていました。日本では赤い手紙がくると男の人は戦争に行かなければならないのです。ぼくは、その時代に生まれなくて良かったなと思います。戦争に行く時に女の子の人達が手を上げて「ばんざい」と言うのです。ぼくはなぜそんな事を言うのかなと思います。ぼくは、今でも戦争はしてはいけないんだなと思います。平和な世界がずっと続けばいいなと思います。

戦争のない平和な世界に

小学4年生 三代澤 憲伸

戦争は、大人の欲のためにおきる。犠牲になるのは、いつだって子どもだ。だからこそ、子どもだって平和のための努力をすべきだ。それには、子どもころから世界の人々とふれ合い、楽しく世界の歴史や文化を学ぶことが大切だと思う。

大人は子どもに、いい見本になるように。子どもは、自分で善悪を判断できるかしこい知識を身につけることが必要だ。

わたし がっしょう
私は合唱で「ヒロシマの^あ有^{くに}る国で」という^{きょく}曲^{うた}を歌ったことがあります。

わたし うた うた
私はこの歌を歌ってから、^{げんぱく}原爆の^{いのち}こわさや^{たいせつ}命の大切さを^し知りました。

ひろしま ながさき げんぱく お おお ひとひと な
広島や長崎に原爆が落とされ多くの^い人々^{のこ}が亡くなったこと、生き残った^{ひと}人の^{すがた}姿はとても^{みにく}醜^{げんぱく}かったことなど原爆の^{はなし}話をたくさん^き聞きました。その^{はなし}話を聞いて私は、とても^{かな}悲しくなりかわいそうだと思^{おも}いました。

またこの^{うた}歌は、わたし ^{ひと}人に「^{いのち}人の生命は^{おな}同じ」と言うことを^{おし}教えてくれました。
た。改めて私は、「^{あらた}改^{わたし}めて私は、^{ひと}人の^{いのち}生命は、^{おも}なんとなく^{おも}なんかない。みんな、
やるべき^{こと}事があって、^う生まれて^き来たんだ。」と思^{おも}いました。この^{うた}歌は、わたし
に^{いろいろ}色々な^{こと}事を^{たくさんおし}沢山教えてくれました。そして、わたし ^{おも}私は思^{おも}いました。なんで
^{かぞく}家族と^く暮らすことも^{ゆる}許され^{せんそう}ない戦争が、^{いま}なぜ今も^お起きているのか。^{たくさん}沢山の
^{ひとひと}人々が^{くる}苦しむだけなのに。わたし ^わ私には、よく^わ分かりません。

みな ^{いのち}いのち ^{おな}おなじように^{たいせつ}大切なはずなのに。

わたし ^{せんそう}戦争がない、^{へいわ}平和な^{しゃかい}社会になればいいなと思^{おも}いました。







池谷 いけたに
英夫 ひでお

征きし身に賜る余生終戦日
敗戦日父より古き兄の墓
軍帽のなほ捨て切れず敗戦日

石原 いしはら
恵美子 えみこ

新月や子を抱く母のやさしき目

浦川 うらかわ
宏志 ひろし

炎昼や一家被爆の墓ならぶ
ひとたびは失せし被爆の髪洗ふ
還暦も古稀も彼方に秋の声

大沢 おおさわ
志織 しおり

こけし工房首キュツと入る秋うらら
菊花展小学生の区長賞
日の白ひ残す布団の子の寝顔

鯉川 こいかわ
武英 たけひで

永遠に変わらぬ平和雲の峰

高麗 こま
実 みのる

近詠（生きる）

戦火知る樹も知らぬ木も花終る
初恋も子育ても遥かなる端居
風鈴の音色に過去がほどけゆく
今日確と生きる手応へ秋耕す
我が秋思消しゴム等では消えぬ過去

小山 こやま
泰子 やすこ

生かされて祈る平和を原爆忌
語りつぎ風化させまじ終戦日
原爆の凶恐ろしや流灯す りゅうとう

下田 しもだ
セツ子 こ

菊水の旗秋風に挙手の礼

高草木 たかくさき
一子 かずこ

蜩やさけぶ声なき爆心地
秋彼岸若き軍服セピア色
爆心をかたる老母や夏の空

高橋 たかはし
道子 みちこ

炎天下玉砂利に伏す民の群
空襲に焼け落つ我が家五月空
終戦日あの日背なの子今停年
螢二羽兄の御霊か去りやらず みたま

田口 たぐち
正子 せいこ

爆心地青桐二世蘇る
明くる年カンナは咲きし爆心地

田村 たむら
もも子 こ

語り部の背の丸さや終戦忌 せな
反核の人の輪和となす雲の峰
核廃の志を継ぐ誓い日々草

津谷 つや
謙三 けんざう

被爆から六十年目の夾竹桃
爆心地変わらぬ流れ大田川
春の朝三十八度線遠く見え

並木 なみき
万佐子 まさこ

夏空をゆく休養のパスポート
ろおお
老鶯や余生を通ふ学生証

松岡 まつおか
香月 こうげつ

予科練の血は残りゐて終戦日
とつこうさん
翼振って夏空に消ゆ特攻棧
夏帽を振って別れし戦友のこと
とも
夏の日や「われ突入」の電波消ゆ

水田 みずた
一芙 いっぶ

原爆忌あゝナガサキの天主堂
終戦の詔聴く十五歳
みことり
敗戦や焦土の街を彷徨へり
敗戦忌軍国の子等白頭に
終戦日六十路の今日も蟬しぐれ

山形 やまがた
れん

新緑や駆けくる大キランドセル
夏めくやガラス戸に透く兎の指紋
水浴びのやがて大胆四十雀

小学2年生 原田 工夢 はらだ たくむ

あげたいな白いごはんを世界中
ホタルさんすんでほしいなさい玉に

小学3年生 石岡 大昌 いしおか ひろまさ

あおいそらみんなのねがいいつとどく

小学4年生 大塚 淳平 おおつか じゅんぺい

せんそうはいのちをうばうこわいもの

小学4年生 垣澤 稚奈 かきざわ わかな

せんそうはぜったいしないやくそくだ

小学4年生 白塚 湧士 しらつか ゆうし

につぽんのへいわをねがうぼくたちは

小学5年生 小澤 昂世 おざわ こうせい

埼玉の未来空気はきれいでゴミはゼロ

小学5年生 高橋 柁哉 たかはし まさや

ゴミがなくきれいな都市は埼玉だ

小学5年生 田所 友洋 たどころ ともひろ

さいたまのはなやみどりがさきほこる

手をつなぎ戦争なくそうみんなの国

小学6年生

岡嶋 おかじま

裕也 ゆうや

小学6年生

新田 にった

幸菜 ゆきな

いつの日かぼうはんグッズいらないね

小学6年生

森田 もりた

翔平 しょうへい

世界中心の国境なくそうよ







こいずみ しげる
小泉 茂

雑詠

吹き荒る日の過ぎたれば雨降りて
春菜の種子を落としたり今日

自らの苦しみ逃れ酒宴に
一人放恣の歌をうたへり

家族らの話の間に思いけり
獨りの夜の歌読むときを

退院せし母を喜びおとづる
人おおくなりて麦秋は過ぐ

夫がもしや生きてゐるか和在ソ抑留者
名簿発表の朝刊を見る

（「昭和萬葉集 還らぬ人々」掲載）

こいずみ しやうへい
故 小泉 正平

雑詠

床に入るや直ちに眠る父あはれ
六十路越して働く父は

庫裡いて聞く水音のさやけさを
庭を流がるる野火止の水

伍長勤務上等兵たる其の友は
姿勢正しく立ち手話すも

父母は共に六十路を半ばなる
今年の春をとみにおとろふ

兎に角も先づ増産と農民は
空を見あげて立ち上がるなり

並木 なみき
清子 きよこ

ふる里の鎮守の森は照り映えて
獅子舞ひ踊る生あるを謝す

猛暑なほ我が世の春と鳴き交す
ミンミン蝉は緑の内に

小学3年生 伊原 凜 いはら りん
あらそいは心にきずをのこすだけ
つづくといいな平和な未来

小学6年生 齊藤 雄也 さいとう ゆうや
人々がつらさこらえたあの日から
近くて遠い六十年

小学6年生 吉野 咲 よしの さき
花畑悲しみやすらぐその場所
手足がなくなる地雷の悲しみ



V 新座市平和展実施結果

V 新座市平和展実施結果

- 1 名 称 「新座市平和展」-新座市の歩みと原爆の悲劇-
- 2 日 時 8月2日（火）～15日（月）午前10時～午後9時30分
（最終日は午後5時まで）
- 3 場 所 生涯学習センター3階ギャラリー1・2

4 概 要

「新座市の歩み」及び「原爆の悲劇」という2つのテーマの展示をした。

「新座市の歩み」については、市の年表、市民からの公募写真、歴史民俗資料館所蔵の戦中・戦後の生活用品の写真、「原爆の悲劇」については、長崎原爆資料館から借用した写真パネルを展示した。

また、友好姉妹都市提携を結んでいるドイツ連邦共和国ブランデンブルク州ノイルッピン市から寄贈された版画、日本降伏の宣伝ビラの写真、中央図書館所蔵の戦争に関する本などを展示しアンケートも実施した。

(1) 新座市の歩み

ア 目で見える市の歴史

新座市の年表と主な出来事の写真37枚をA4版に拡大して展示した。

イ 公募写真

写 真 提 供 者	主 な 写 真
しんざわ まさよし 新沢 正 慎 氏	昭和30年代の新座市の風景 ほか
た な か さだいち 田中 定 一 氏	昭和30～50年代の新座市の風景、里神楽 ほか
た な か とし お 田中 利 雄 氏	東京オリンピックの風景 ほか
なかざわ せつこ 中澤 節 子 氏	満州の年表、地図、中国の写真 ほか
な み き かつじ 並木 勝 司 氏	昭和30～40年代の新座市の風景 ほか

(2) 原爆の悲劇

長崎原爆写真パネル

原爆投下後の惨状を写したパネル38点

(3) その他

ア 版画

新座市と平成１５年度に友好姉妹都市を提携したノイルッピン市から
寄贈された日露戦争の版画

イ 日本降伏の宣伝ビラ（実物は新座市歴史民俗資料館に所蔵）

１９４５年にアメリカ合衆国大統領ハリー・Ｓ・トルーマンによって
書かれた日本降伏の宣伝ビラの写真

ウ 戦中・戦後の生活用品

新座市歴史民俗資料館で所蔵している戦中・戦後の生活用品の写真

エ 戦争関係の本

中央図書館で所蔵している戦争に関する本

５ 結 果

来場者数１，３９９人

6 新座市平和展展示風景

(1) 新座市の歩み

ア 目で見える市の歴史



イ 公募写真



(2) 原爆の悲劇

長崎原爆写真パネル



(3) その他
ア 版画



イ 日本降伏の宣伝ビラ



ウ 戦中・戦後の生活用品



エ 戦争関係の本



発行 平成17年12月

編集 新座市企画総務部企画課

〒352-8623 新座市野火止一丁目1番1号

TEL 048-477-1111 (代表)

「戦後60年・市制施行35周年記念 戦後60年の願い ～私たちの記憶の
中の戦争～」は、新座市障がい者就労支援センターで、就労に向けて実習を
している人たちが製本しました。

